



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	論談：北京フォーラム2010に参加して
Author(s)	櫻井, 義秀
Description	中外日報 2010年11月20日掲載
Citation	中外日報
Issue Date	2010-11-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48082
Type	article
File Information	Chugai_Beijing.pdf



北京フォーラム 2010 に参加して

櫻井義秀

1 文明的和諧をめざす北京フォーラムとは

二〇一〇年一月四日から七日にかけて北京フォーラムという学術大会に出席した。この大会は年1回開催され、中国の大学関係者から推薦されたものが参加者・発表者になる。

北京は今年の九月に続いて二度目の訪問だが、北京オリンピックに合わせて整備された近代都市空間の偉容は地方の人々をはじめ外国人をも驚かせるものだ。五日は釣魚台国賓館、六、七日は北京大学英杰交流センターで開催され、この大会が国の威信をかけたものであることもよく分かった。

北京フォーラムは二〇〇四年から始まり、今年まで、「文明的和諧と共同繁栄」をテーマに、おおよそ哲学（文化）・歴史・経済・政治・国際関係・教育・医学・環境等の分科会が組まれ、二日間の研究発表・討議で構成される。基調講演者は、二〇〇六年に著名な国際政治学者の入江昭氏、二〇〇九年にはノーベル賞（経済学）受賞者のケネス・アロー氏や、東京大学・早稲田大学の総長等、学術界の重鎮を招いている。二〇一〇年の特別部会は、ドイツの神学者であるユルゲン・モルトマン氏とアメリカの新儒家として著名な杜維明氏によるキリスト教と儒教の対話だった。

これだけの大会であれば、相当な経費がかかるだろう。韓国の財閥企業S Kグループが後援している。しかし、かけるだけの値があると政府も韓国の民間企業も思うわけだ。

さて、主題の「和諧」である。この言葉は、和らぎ、調和といった意味らしいが、二〇〇五、六年頃から中国の国家指導者に使われ初め、現在は、高速鉄道の車両名「和諧号」ともなっている。国内向けには、「和諧社会」であり、国際関係で用いれば、「和諧世界」の実現となる。中国は国内の地域間・階層間格差が大きく、近隣諸国との領土問題も複雑なので、和諧をスローガンにしているのではないか。だが、実現はなかなか難しいのではないか、と思われる人が多いだろう。

私は政治学者ではないので、「和諧」の中身にあまり踏み込みたくないが、鳩山前首相が唱えた「友愛」や「東アジア共同体」という理念とは次元を異にする政治の指針であることに注意したい。和諧世界の概念は、二〇〇五年、胡錦濤国家主席がアジア・アフリカ首脳会議で提案したものだが、政治・経済・文化・安全保障、環境等広範な分野にわたる。主権の確立・平和共存のために何が必要か、和諧社会実現のために複雑な利害対立の構造をどう調整していくのか。理念ではなく、実質的な政策や国家機構で行うというのが中国である。

北京フォーラムとはその一環であり、学術の世界も政治的实践と無縁ではない。

2 宗教と和諧

哲学部会において宗教がこれほど論じられるのは初めてだそうだ。発表の題目と発表者の国籍を一覧表にしておいたのでご覧いただきたい。中国の研究者（大半が北京大学）が

過半を占め、中国語での発表だった。この大会は分科会含めて全て同時通訳が配される念の入れようだ。

中国側の発表は和谐社会と宗教、和諧世界と宗教との関係という高尚だが抽象的な議論が多かった。席上、和諧に至らない状況、具体的には文明の対立に名を借りた覇権国家同士の争いや、宗教の争いの観を呈する地域紛争をどう具体的に調整していくのか、現実的な議論が必要ではないのかという意見が出された。この一回限りの提案に対して、中国側からは中国の宗教伝統には和諧の精神があり、実際に和谐社会実現に役立ってきたのだという意見が表明された。確かに、発表もそうだが、中国には三教帰一（儒教・道教・仏教）の思想伝統があり、これにキリスト教とイスラム教が加わって政府公認の五教がさらなる和諧をめざそうというわけである。中国共産党は無神論の立場に立つが、和諧の秩序を乱さない限りにおいて信教の自由を保障し、保護的政策を取ることが宗教政策担当官より報告された。

現在、中国では仏教寺院が復興し、道教の道観に大勢の人々が集まり、観光産業とも結びついた宗教の活性化が観察される。行き過ぎた宗教伝統の観光化に歯止めが必要という発表もあり、誰がどのように歯止めをかけるのかと筆者が質問したところ、中国仏教協会と地方政府の適切な指導によるとのことだった。

総じて、宗教行政にパターンリズムの感は否めないが、宗教は様々な社会的意志や集団を入れ込む容器でもあるために、一三億人の統治をなす和諧の理念を超えた宗教の活動を認めないということになるのだろう。ここで中国の政教関係や宗教活動の特殊性を指摘することは可能だが、それはあくまでも自分の社会や宗教伝統を元にした比較の結果である。

アメリカは宗教的多元主義の社会だが、主流派宗教と傍流・カルト視されたりする宗教の価値的序列は明確である。多様性は認めるし、異質なものにも寛容である。しかし、少数派の権利の主張に対抗する保守派の勢力が極めて強い。そして、その上にアメリカ的秩序（共和制とキリスト教）への忠誠を誓う宗教的文化伝統（市民宗教とも公共宗教とも呼ばれる）がある。中国はこの至高の価値に和諧（それを実質化する国家）が入る。日本には憲法の理念が入るだろうが、文化伝統や理念の具現化を図る社会機構がないために、宗教の自由に境界をひく発想には相当の違和感があるだろう。

3 相互理解に基づいた交流

現在、日本と中国では尖閣諸島をめぐる一連の問題勃発に相互の国民感情が大いに悪化している。何が正当であるかは、地政学的な対立構造や歴史認識の差異が相まっているために単純に一方が善で他方が悪というふうに片付けられない難しさがある。加えて、中国は和諧を実現するに足る国力を達成した自負心（GDP 世界二位）が国民レベルにも行き渡り、政治経済の閉塞感から抜け出しきれない日本人の心理と明暗をなす。中国は付き合わないで済む隣人ではない。相手に合わせるのでも、こちらのルールを吞ませるのでもない共存の道を探ってこそ、日本の発展もある。このような互惠関係構築に資する相互理解や

相互交流の機会を増やすことが文化やメディアに関わるものの役割ではないか。昨今の世論調査を元に中国への違和感を勇ましく論じたりするだけでは真に心許ない。

表 信仰と責任 グローバル化時代における内省的的精神

発表タイトル	発表者の国籍
宗教的和諧—グローバル化時代の新理念	中国
他者という挑戦	イタリア
和諧世界に向けた中国の経験	中国
日本において宗教は社会資本になるか？（櫻井義秀）	日本
多元的・グローバル化時代において宗教は人類の幸福に資するか？	韓国
信仰的寛容—グローバル化時代における共存の精神	中国
グローバルな統治の理論と実践—典型的な事例	ロシア
グローバル化時代における中国宗教の寛容と和諧	中国
世界的事件における信仰と責任—国民国家の持続	アメリカ
文化アイデンティティと普遍的価値	中国
排他主義と多文化主義	中国
グローバル化された世界における宗教的排他主義	イギリス
宗教復興とグローバルな政治の動態	アメリカ
人間の尊厳—ルネッサンス時代の人文主義	イタリア
経典の読解における信仰と責任	中国
中国仏教の現代的意味	中国
混沌と寛容	中国
道教の信念と現代社会	中語
伝統思想の現代化における三つの局面	中国
宗教的ツーリズムの理論、実践と方法	中国
一致と和解の地平を求めて—ヒンドゥー教の視点から	アメリカ
イスラム革命におけるイランと西側の語り	イラン
グローバル化時代における科学、精神性と創造性	韓国
スピリチュアル革命—21世紀の挑戦	ボスニア
宗教を通じた平和	カナダ
統合と共存—中世中華帝国における儒教的世界秩序観	韓国
法華経の包括性と宗教間対話（創価大学 菅野博史教授）	日本
合理化と伝統—ウェーバーの中国理解	中国
国民国家と文明	中国
中国仏教と中国宗教の特徴	中国

文明間対話における主体の問題	中国
国教と儒教—康有為の業績	中国